優秀賞　高学年の部

ありがとうの山

群馬県
群馬大学教育学部附属小学校　六年　伊佐　碩恭

冷蔵庫の上に重なり合った、今にも崩れそうなラップの山。仏壇の前にそびえるのは、ろうそくや色々な香りのするお線香の山。テーブルの上には、写経用小筆の平たい山。

おじいちゃんの家には、とにかく同じ品物が大量にあるので驚かされる。もしもの時に備えて買い置きをしていたのだろう。（心配性のおじいちゃんらしいな）と、ついつい微笑んでしまうが、もうその山がそれ以上高くなることがないと思うと、もうその品物が使われないのかと思うと、立派な山が頼りなく寂しそうに見えた。

最高峰の高さを誇っていたおじいちゃん作の山は、その小筆で書きためた般若心経のエベレストだった。何年か前に質問した時、「今日で、三万五千百枚目を書いたよ！」と、言っていたから、優に四万枚は越えていたと思う。あの時、「毎日、亡くなったおばあちゃんやご先祖様の供養の為に書いているんだよ」と、いつもの笑顔より更に丸い笑顔で教えてくれた。おじいちゃんは、亡くなった大切な家族への思いも山盛りだったのだ。

そんなおじいちゃんの丸い笑顔が、いつの間にか半分くらいになり、いつの間にかもっともっと小さくなり、信じられないくらい小さくなった四月の僕の誕生日の前日、おじいちゃんはおばあちゃんの元へ行ってしまった。

おじいちゃんは、唯一の男孫である僕を本当に可愛がってくれた。夢を持って頑張っている僕を、いつも優しく強く応援してくれた。おじいちゃん流の応援もこれまた桁外れの特盛りだった。おじいちゃんからもらった品物で一番多いのは「お守り」。どこへ行っても、神社仏閣で僕の健康や夢の実現をお祈りしてくれていたから、その数は驚くほどだ。低学年の頃、習い事用の大きなバッグがお守りでいっぱいになり、肝心の教材が入らない「お守り専用バッグ」と化した時は、家族みんなで大笑いした。

般若心経の山を崩しておじいちゃんのお布団にしたあの日からもう五ヶ月が経つ。しばらくの間、笑顔のおじいちゃんがあの家に居ないことがどうしても信じられなかった。僕はなかなか奉納できないお守りの山を眺めながら、おじいちゃんに（あーしてあげれば良かった、こーしてあげれば良かった）と、情けない後悔の山ばかり作っていた。

でも、この夏、僕の大きな夢だった大会を前に、このままの自分では駄目だと気が付き、毎日おじいちゃんの写真に手を合わせて、「おじいちゃんありがとう」と祈ることにした。おじいちゃんが「もういいから」と、まん丸笑顔で遠慮しても、感謝の気持ちを永遠に伝えるつもりだ。僕は孫の中で一番おじいちゃんに似ているのだから、後悔の山なんて格好悪いのはやめて、僕作の「ありがとうの山」を天国のおじいちゃんに届けたい！